

日本の葡萄唐草について

栗田 美由紀

一

唐草に葡萄の果房や葉をつけた文様を葡萄唐草とよぶ。葡萄をモチーフとした装飾文様は、ギリシャ・ローマを中心とした葡萄を栽培する地域で、酒と豊穡の神ディオニソスに対する信仰と結びついて発達したが、古代イラン地方でもまた、葡萄は泉と豊穡の女神アナーヒターへの信仰と結びつき、柘榴とともに瑞果文として用いられていた¹⁾。葡萄が中国へ伝えられたのは漢の武帝の時、張騫あるいはその関係者によってもたらされたのが初めとされ、中国における早い時代の葡萄唐草の例は、後漢時代の綾や南北朝時代の雲岡石窟の装飾にみることができ、唐代に入り西域との交通がさかになると、葡萄唐草は西方的な異国情緒あふれる文様として人気を博し、初唐期には海獣葡萄鏡をはじめとして壁画や様々な器物の装飾に用いられるようになった²⁾。このような大陸の影響を受けて、日本にも葡萄唐草の例は少なからず存在する。日本の葡萄唐草についてはすでに林良一氏、伊東史朗氏によって作例の紹介やいくつかの作例についての検討が行われている³⁾。本稿ではこれら先学の研究をふまえ、日本の工芸品にあらわされた葡萄唐草の変遷をたどり、日本における葡萄唐草の特徴について考えてみたい。

二

葡萄唐草は、自然の葡萄の果房や掌状葉、巻ひげを主な構成要素とする写実的な葡萄唐草と、半パルメット唐草や蔓唐草、花唐草といった他の植物文様と葡萄の果房や葉が結びついた複合的な葡萄唐草の二種類に大別される。日本の工芸品にあらわされた葡萄唐草では、前者は少なく、後者の他の植物文様と結びついた葡萄唐草の例が多い。そこで本稿では、葡萄唐草を主体となる唐草の特徴から次の四種類に分類し、順次、作例をみていくことにしたい。

- ① 半パルメット唐草を主体とするもの
 - ② 蔓唐草を主体とするもの
 - ③ 花唐草を主体とするもの
 - ④ 葡萄の果房・葉・巻ひげを主な構成要素とするもの
- なお文様の部位の記述にあたっては、便宜的に葡萄の葉の基部につく葉形を萼形、茎の分岐部を包む葉を托葉とする。

① 半パルメット唐草を主体とするもの
法隆寺金堂天蓋（中の間） 吹返し板（挿図1）

半パルメット唐草の中に細長い葡萄の果房が描かれる。果房には二股の萼形がつき、半パルメットには鋸歯状の切込みをもつものがある。唐草は基本的には波状をなすが、規則性はなく自由に展開する。ところどころで半パルメットの先が長くのびて茎にからみつく。

ここにあらわされたものとはほぼ同形の果房の表現は、白鳳から奈良時代初期とされる加守庵寺出土の瓦の文様にみることができ、中国の作例では、半パルメット唐草を主体とした葡萄唐草は、雲岡石窟の第十二窟主室南壁の明窓周縁や龍門石窟魏字洞北の弥勒三尊仏龕光背、隋代の敦煌莫高窟第四〇七窟の光背などに例がある。しかし、法隆寺の天蓋文様中にあらわされた鋸歯状の切込みをもつ半パルメットの形は、むしろ百濟・武寧王陵出土の金製冠飾のものに近い。武寧王陵からは六世紀前半のものと考えられる王と王妃の冠飾が出土しており、王のものとしてされる冠飾には鋸歯状の切込みのある半パルメットとともに葡萄の果房も表現されている。本天蓋は金堂の建立とほぼ同時期の六八〇年頃の製作と考えられているが、ここに描かれた葡萄唐草は、半パルメットの形状から朝鮮半島の様式の流れをくむものであることが推察される。

伝橘夫人念持仏厨子 上框（法隆寺）（挿図2）

厨子の上框に、小さな葡萄の果房と掌状葉をつけた半パルメットを主体とする唐草が描かれる。葡萄の果房は輪郭のみで表現し、葉には葉脈をあらわす。茎には瘤形がつき、蔓や葉の先に弧線を描く。框の角にあたる部分には対葉形を配置し、各辺の唐草をつないでいる。

輪郭のみを描く葡萄の果房の表現は、隋時代の敦煌莫高窟第三二四窟の藻井縁飾や同第四〇七窟の光背にもあり、これらはいずれも半パルメットと共に描かれている。また角に対葉形をおき唐草をつなぐ例は、初唐の敦煌莫高窟第三八七窟の藻井の縁飾や顕慶三年（六五八）の尉遲敬德墓誌の文様にみること

ができる。ただし三八七窟の藻井文様には暈網彩色による花形や葡萄の掌状葉がついたもので、尉遲敬德墓誌文様に描かれているのも初唐期によくみられる三葉形がついた花唐草である。両者には半パルメットの葉は描かれず、上框の文様よりも進んだものといえる。一方、蔓に瘤がつき、半パルメットや蔓の先に弧線を描くという点では、むしろ六世紀の高句麗・真坡里第一号墳の壁画の文様に近い。厨子の製作は七世紀末から八世紀初頭とされているが、上框の文様は旧来の朝鮮半島系の文様に、隋から初唐期の植物文様の要素を取り入れた複合的な唐草文と考えられる。

半パルメットの葉をつける葡萄唐草は、日本では七世紀末から八世紀初頭に出現する。半パルメットの表現は六世紀の朝鮮半島の作例に近いものがあり、初唐期の葡萄唐草との間には直接的な影響関係は認められない。

② 蔓唐草を主体とするもの

法隆寺五重塔舍利容器 金製卵形透彫容器・銀製卵形透彫容器（挿図3）

先端を丸く巻込んだ蔓唐草の中に、先が膨らんだ葡萄の果房が透彫であらわされている。金容器では唐草の中に宝珠形があり、銀容器では三葉形が表現されている。葡萄の実が先が曲がって膨らみを帯び、一部には萼形がつくものもある。唐草は一つの点から複数の蕨手が出て、ほぼ左右対称に展開する。ただし銀容器では蕨手の向きは一定せず未整理な部分があるなど、細部では均整を欠く。

葡萄の果房の形は、前掲の法隆寺金堂天蓋のそれに近い。また同様の先端を丸く巻込む蔓唐草は、白鳳時代と考えられる法隆寺の金銅山形飾金具にみることができ、そこには金容器のものに近似した宝珠形もあらわされており、時代の近接を感じさせる。



1-1 法隆寺金堂天蓋 (中の間) 吹返し板

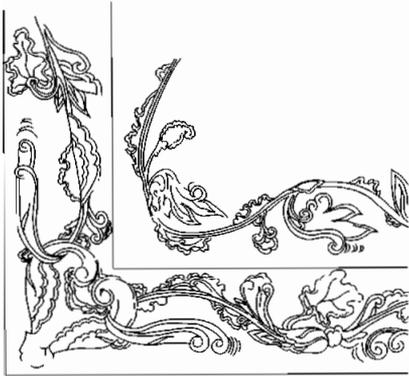


1-2 加守廃寺出土瓦



1-3 武寧王陵出土金製冠飾

挿図 1



2-1 伝橘夫人念持仏厨子 上框



2-2 敦煌莫高窟第314窟藻井



2-3 敦煌莫高窟第407窟光背



2-4 敦煌莫高窟第387窟藻井



2-6 真坡里第1号墳壁画



2-5 尉遲敬德墓墓誌

挿図 2



銀容器



金容器

3-1 法隆寺五重塔舍利容器



3-2 金銅山形飾金具 (法隆寺)

挿図 3

法隆寺五重塔塔本塑像 西面 金棺（第一号像）（挿図4）

蕨手の連続からなる蔓唐草に葡萄と果房と花形があらわされる。葡萄の果房は細長く、先が長く伸びて三弁の萼形がつく。唐草は規則的な波状を描き、金棺長側面の両端下を起点として中央で接する。

初唐期の敦煌莫高窟第三三五窟の藻井縁飾は、金棺の文様と同様の蕨手を主体とする蔓唐草に数種類の花形をつけたものであるが、この中に金棺の文様に似た花形をみることができる。縁飾の花形は背中合わせに開いた蕨手の上に、対向する蕨手をおき、さらに花卉形を左右に出している。この構成は基本的に金棺のものと同じである。また尖頭の花弁形をつけた花形は敦煌莫高窟第三四〇窟の花形など初唐期のものによくみることができる。金棺は五重塔塔本塑像完成当初のものと考えられているが、こうした特徴から金棺の葡萄唐草は初唐の様式を受けたものということができよう。

薬師寺金堂基壇出土透彫金具（挿図5）

昭和四十六年の発掘調査の際に薬師寺金堂の基壇から出土した金具で、金銅幡の垂飾と考えられている。金具の上方は失われており、全体像は明らかでない。先端を固く巻込んだ蔓唐草に、細長い葡萄の果房とカエデ形の葉があらわされる。果房には二股の萼形がつき、茎は心葉形を描いて縦方向へ展開する。

本金具の葡萄の果房および葉の形は、後述する東大寺金堂鎮壇具の金鈿装大刀にあらわされた葡萄唐草のものと近い。また前掲の加守庵寺出土の瓦の文様にもカエデ形の葉がついたものがある。縦方向へ展開する葡萄唐草の例としては、唐・龍朔二年（六六二）建造の大明宮含光殿から出土した塼があげられる。含光殿出土塼には丸みのある葡萄の果房と掌状葉があらわされており、この点では透彫金具と異なるが、茎に絡む蔓のようすや蔓の先端の巻込み形は造形感覚として近いものがあるように思われる。

東大寺金堂鎮壇具 金鈿装大刀（挿図6）

大仏殿創建当初に埋納されたもので八世紀前半の製作と考えられている。鞘に金の細金で鳥や葡萄唐草があらわされている。唐草には葡萄の果房とカエデ形の五葉、花形がつき、花唐草に近い。果房は細長く、二股の萼形がつく。花形は背中合わせに開いた蕨手、あるいは開いた葉形の上に尖頭の花形がついたもので、内部には花脈があらわされる。

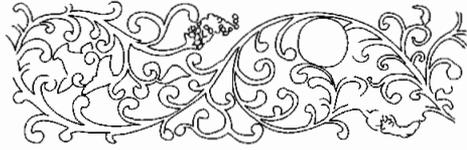
カエデ形の葉は薬師寺の金堂基壇出土の透彫金具の葡萄唐草に近い。また蕨手がついた花形は、正倉院の礼服御冠残欠（北倉一五七）の鳳凰や葛形裁文にあるほか、中国の作例では唐・延載元年（六九四）の涇川県大雲寺出土の舍利容器（銀槲）や唐・開元二年（七三八）埋葬の李景由墓から出土した銀盒にみることができる。金鈿装大刀の花形とこれらを比較してみると、大雲寺出土の舍利容器では蔓唐草の一部に半パルメット形が残っており、この点で舍利容器の文様は金鈿装大刀のものよりも古様といえる。よって金鈿装大刀の文様は李景由墓出土の銀盒と近い頃、中国の八世紀前半の様式を反映したものと考えられる。

蔓唐草を主体とする葡萄唐草は、日本では半パルメット唐草を主体とするものとはほぼ同時期に出現し、遺例は八世紀前半に集中する。葡萄の果房はいずれも細長く、カエデ形の葉とともにあらわされることがある。蔓や花形の表現は初唐様式を反映したもので、時間の経過とともに葉や花形が付加され、花唐草へと近づく傾向がみられる。

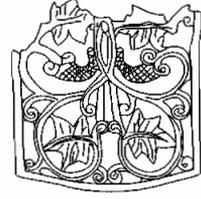
③ 花唐草を主体とするもの

薬師寺金堂本尊台座内発見魚子地花唐草文銅板（挿図7）

薬師寺金堂本尊の台座内部より発見された銅板で、魚子地に単葉、三葉、対



4-1 法隆寺五重塔塔本塑像 金棺



5-1 藥師寺金堂基壇出土透彫金具



4-2 敦煌莫高窟第335窟藻井



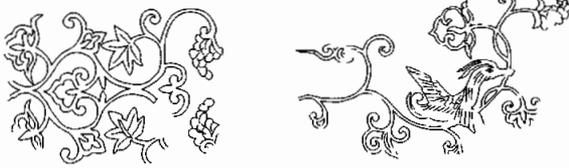
5-2 大明宮含光殿出土磚



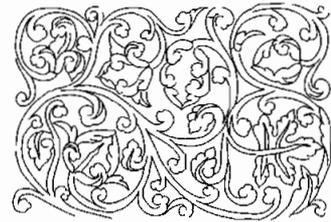
4-3 敦煌莫高窟第340窟

插圖 4

插圖 5



6-1 東大寺金堂鎮壇具 金鍍裝大刀



7-1 藥師寺台座內發見發見魚子地花唐草文銅板



6-2 礼服御冠
残欠 (正倉院)



6-3 大雲寺出土
舍利容器 (銀槲)



6-4 李景由墓
出土銀盆



7-2 何家村出土
葡萄龍鳳文銀碗



7-3 敦煌莫高窟
第387窟 藻井

插圖 6



7-4 泉男生墓墓誌

插圖 7

葉形とともに葡萄の掌状葉がついた唐草があらわされる。蔓の先端は雲形をなし、唐草は波状に展開するが規則性はない。

葉の種類が多く、またそれぞれの葉がほぼ同じ大きさで描かれているため、全体の統一感が失われて散漫な印象を受ける。これはこの銅板の作者が、実在する植物をモチーフにした葡萄の葉と空想上の対葉形や三葉形の葉を区別なく、大陸伝来の目新しい植物文様の一つとして同列に受け止めていたことを示しているものと思われる。本銅板と同形の葡萄の掌状葉は何家村出土の葡萄龍鳳文銀碗¹⁶にもあらわされているほか、雲形を内向きに二段重ねてその上に対葉形をつける葉の表現は、初唐の敦煌莫高窟第三八七窟の藻井文様などに例がある。また蔓の先が雲形に変化した唐草は唐・咸亨元年（六七〇）の李勣墓誌や唐・調露元年（六七九）の泉男生墓誌の文様に¹⁷近く、三葉形や外側に葉形をつけた対葉形も初唐期の作例によくみられるものである。以上のことから本銅板の唐草は七世紀後半の初唐の様式を受けたものと考えられる。

薬師寺金堂本尊薬師如来坐像台座（挿図8）

葡萄の果房と葉からなる波状唐草である。葉は強い風を受けたように動きをもってあらわされ、果房は葉に包まれている。茎の分岐部には托葉がつく。托葉には雲形の切込みがあり、先は蕨手状に巻込んでいる。葉は基本的には掌状をなすが、判別しにくいものもある。葉の基部には托葉と同様の雲形の切込みのある蕨手と栓形があらわされる。

本台座の文様についてはすでに林良一氏、伊東史朗氏の論考がある。林氏は則天武后期の様式を反映したものと¹⁸し、伊東氏も初唐風としている。文様の細部を中国の作例と比較すると、則天武后期のものとされる敦煌莫高窟三二一窟¹⁹には台座文様と同形の托葉がついた植物が描かれており、時代の近接が感じられる。また葉の中にさらに文様モチーフを重ねて配置する例は、永泰公主墓出

土の帯金具など初唐期の作品から、ままみることができるようになるのである。盛唐期の敦煌莫高窟第二〇八窟の藻井には台座文様と同様の葉で実を包んだ葡萄唐草が描かれているが、ここでは葉は掌状葉ではなく、盛唐期の花唐草に一般的な大きく翻った葉が用いられている。台座文様では葉は葡萄の掌状葉の形をとどめており、この点で二〇八窟の藻井文様よりも古様といえよう。また台座文様の葉の基部にあらわされた蕨手についてみると、唐・天寶二年（七四三）の隆闡奉仕碑の文様ではさらに表現がすみ、蕨手の雲形の切込みが失われ、葉の内部にも蕨手があらわされるようになっていく。以上のことから本台座の文様はやはり初唐の七世紀末から八世紀初頭の様式を反映したものであるだろう。

正倉院南倉七〇 円鏡十二支八卦背第十三号（挿図9）

技法的な面から日本製と考えられている鏡であり、鏡背の最外縁に葡萄の果房を含む花唐草がめぐる。葡萄の果房と風に翻る葉、花形を交互に配置し、茎の分岐部には托葉をあらわす。果房は細長く、二股の大きな萼形がつく。

同様の果房は法隆寺金堂天蓋や薬師寺金堂基壇出土透彫金具、東大寺金堂鎮壇具金鈿装大刀にもあり、これらと同じ系統に属するものといえよう。一方、鏡背文様の葡萄唐草という点からみると、海獣葡萄鏡の葡萄唐草では果房は丸みを帯びたものとするのが一般的であり、本鏡のような細長い果房は鏡背文様の葡萄唐草としてはめずらしい。日本に伝存する海獣葡萄鏡は中国製または中国製の鏡を原型とした踏返し鏡であるが、本鏡は日本製と考えられていること、また前述のように同じ特徴をもつ葡萄の果房が日本の作例にいくつか存在していることから、本鏡背の葡萄文様はある早い段階で日本に伝来し、以後国内で受け継がれていたものである可能性が考えられよう。

正倉院中倉一四二—一〇 沈香木画箱(挿図10)

箱の畳摺の部分に透彫で波状唐草があらわされている。唐草には花卉のような大きな萼形がついた葡萄の果房と葉(あるいは花形)がつき、果房や葉の基部からさらに蔓が伸びる。茎の分岐部には托葉と合掌形の葉形がつく。精緻な作りからこの箱を唐製とする意見もある²²⁾。

この唐草に先行する形を示すものに正倉院の銀壺(南倉一三)の文様がある。銀壺には天平神護三年(七六七)二月四日の銘があり、称徳天皇が東大寺へ行幸した際の献納品といわれるが、器形や文様から八世紀前半の唐製と考えられている²³⁾。この銀壺の肩の部分に四弁の花弁ともみえる大きな萼形がついた葡萄の果房と掌状葉、花と果実の合成花、対葉花文をつけた波状唐草が描かれている。蔓の分岐部には托葉形と対葉形があり、この対葉形は六七九年の泉男生墓の墓誌文様に通じる。木画箱の唐草の分岐部にみられる合掌形の葉はこの対葉形が変化したものであろう。また銀壺の文様では、先端に小さな葉がねじれるようについた茎が分岐部から伸びている。これは葡萄の巻ひげが変化したものと考えられ、木画箱の実や葉の基部から伸びる蔓もまた葡萄の巻ひげの簡略形とみることができる。以上のことから、木画箱の葡萄唐草は八世紀前半もしくはこれに少し遅れた時期の様式を受け継ぐものと考えられる。

正倉院北倉四七 紫地鳳形錦御軾(挿図11)

天平勝宝八歳(七五六)の『国家珍宝帳』記載の品で²⁴⁾、鳳凰の周囲に波状の葡萄唐草があらわされている。唐草には葡萄の果房と葉が交互につき、茎の分岐部には托葉と花形がつく。托葉の下部に括りがある。果房の近くに巻ひげの代わりに小葉があらわされ、葉の基部には蕨手状の巻込みがある。松本包夫氏は糸の太さが一定でなく、織線にむらがあること、地色の異なる裂があることなどから本錦を唐製を見本にした日本製としている²⁵⁾。同種の葡萄唐草は後述の

ように数種類伝存するが、この錦の文様はその中でも葡萄の実や葉がはつきりとあらわされている。葉の基部にあらわされた蕨手状の巻込みは、薬師寺金堂本尊台座の項で挙げた七四二年の隆闍奉仕碑の文様に近い。

正倉院南倉一四八 古屏風装古裂 第63号—1 赤地鳳凰唐草丸文臈纈(挿図12)

前述の紫地鳳形錦御軾と同様、鳳凰を囲む波状唐草である。臈纈によってあらわされた文様であるため細部は簡略化されているが、葡萄の果房と切込みのある葉が認められる。茎の分岐部につく一筋の線は巻ひげを表現したものである。臈纈の裂は天平勝宝年間以降さかんになった技法とされるから、本作例も八世紀中ごろの製作と考えられよう。

正倉院南倉一七九—六 緑地狩獵連珠文錦(挿図13)

連珠文の周囲にあらわされた波状唐草で、切込みのある葉と、花弁とも見える大きな萼形がついた果房からなる。茎の分岐部には托葉と花弁形が表現され、托葉には括りがある。果房の近くに小形の切込みのある葉がつく。

同種の文様は天平勝宝四年(七五二)の大仏開眼会に用いられた唐散楽の接腰(南倉一二一女舞接腰残欠・同噴面接腰)にもあり、八世紀半ば頃に用いられていた文様であることが知られる。果房近くの小型の葉は巻ひげが変化したものと思われるが、ここでは葉にはつきりとした切込みがあらわされている。果房の萼形は大きく、花心に葡萄の果房をつけた合成花を思い出させる。これは本文様が花唐草へ一層接近したものであることを示すものであり、六四八年の寤誕墓誌に見えるような写実的要素の強い葡萄唐草から後述のギメ美術館蔵の唐製錦の例を経て花唐草へと変容していく過程の一つをあらわしているものといえよう。



8-1 薬師寺金堂本尊薬師如来坐像台座



挿図9 円鏡十二支八卦背第13号 (正倉院)



8-2 敦煌莫高窟321窟壁画



8-3 永泰公主墓出土带金具



10-1 沈香木画箱 (正倉院)



8-5 隆闍奉仕碑



10-2 銀壺 (正倉院)



8-4 敦煌莫高窟第208窟藻井

挿図8

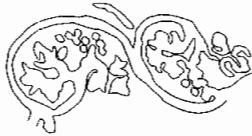


10-3 泉男生墓墓誌

挿図10



挿図11 紫地鳳形錦御軾 (正倉院)



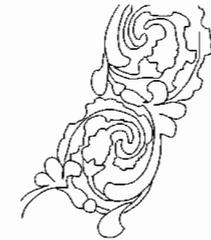
挿図12 赤地鳳凰唐草丸文縹緞 (正倉院)



15-2 敦煌莫高窟第209窟藻井



挿図13 緑地狩獵連珠文錦 (正倉院)



15-3 敦煌莫高窟第407窟光背



挿図14 法隆寺献納宝物 狩獵文錦褥

15-1 阿弥陀三尊
及び二比丘厨子
(法隆寺)

挿図15

法隆寺献納宝物（N40）狩獵文錦褥（挿図14）

前掲の緑地狩獵連珠文錦と同じく連珠文の周囲にあらわされた葡萄唐草である。しかし緑地狩獵連珠文錦に比べると、こちらでは連珠文の間隔は広くなり、葉の切込みも判別しにくい。大きな萼形がついた果房の表現は粗く、分岐部の托葉や苞形の形も不明瞭で全体に散漫な印象がある。これを製作年代の下降を示すものと考えれば、製作は八世紀後半と考えられよう。大仏開眼会で使用された緑地狩獵連珠文錦と同じ構成の文様があいまいなものとなりながらも存在するという事は、このような文様が一時的なものではなく、一つの文様パターンとしてある程度の期間継続して用いられていたことを示している。

花唐草を主体とする葡萄唐草は、日本では半パルメット唐草や蔓唐草を主体とするものに少し遅れて出現する。早いものは器物裝飾にあり、染織品の作例は八世紀半ば頃に集中する。葡萄本来の掌状葉は宝相華唐草によく用いられる切込みのある葉や単葉に変化し、巻ひげもまた小葉として描かれたり、あるいは省略されて、本来の形を失う。果房につく萼形も大きく、花芯に葡萄状の房をつけた合成花を思わせるものが多い。

④ 葡萄の果房・葉・巻ひげを主な構成要素とするもの

阿弥陀三尊及び二比丘厨子（法隆寺）（挿図15）

七世紀末から八世紀初めの製作とされる厨子の内部に描かれた葡萄唐草である。葡萄の果房、葉、巻ひげがあらわされ、茎はゆるやかな波形を描いている。果房には萼形はなく、現実のものに近い。葉は掌状をなすが、その表現はあいまいで海藻のようにゆらめいて描かれる。巻ひげは簡略化されている。茎の分岐部には托葉と新芽形があらわされ、一部に先の丸い三葉形がつく。

長く引き伸ばされた掌状葉は初唐期の敦煌莫高窟第三二二窟の仏龕縁飾や同

二〇九窟の藻井の葡萄唐草にみることができ、厨子の文様では、これらほどはつきりとした掌状は形作られていない。一方、隋時代の敦煌莫高窟第四〇七窟の光背には海藻のような葉がついたパルメット系の葡萄唐草が描かれている。厨子にあらわされた葉をこの両者の中間に位置するものとみれば、厨子文様は初唐期でも早い時期の様式を反映したものと考えることができる。

正倉院中倉五七 最勝王経帙（挿図16）

「天平十四年」（七四二）の年紀があり、迦陵頻伽の周囲に葡萄唐草があらわされている。唐草は葡萄の果房と三葉形による波状唐草で、分岐部に托葉と花形がつく。葉の基部付近には先を巻込んだ波形があらわされるが、これは巻ひげを表現したものと思われる。

同種の葡萄唐草の例としてはギメ美術館蔵の唐製錦があげられる。唐製錦の文様は円形の主文と菱形の副文からなる。主文は中央に鳥を配置し、周囲を葡萄唐草で囲む。葡萄唐草は葡萄の果房、風に翻る三葉形、花形をつけた波状唐草で、分岐部には托葉と花弁形がつき、巻ひげをあらわす。副文は茎を括りや花形でつないだ連結式の唐草で、掌状葉をあらわす。主文の波状唐草の蔓は近くの茎に自由に絡みつき、葡萄の果房には三弁の萼形がつく。

この錦の文様についてみると、分岐部の托葉が二段に分かれて上部がチューリップ形をしているのは、六三〇年の函州昭仁寺碑の托葉の表現が発展したものと思われる。唐草が整理されず、茎が自由に絡み合う様子は六七九年の泉男生墓の墓誌に描かれた葡萄唐草より古様で、六五八年の尉遲敬德墓誌の唐草に近い。ただし副文の二重の括り部分の下端の列弁形は、泉男生墓誌の文様に同様の表現がみられる。以上のことからギメ美術館の錦は、七世紀後半頃のものと考えられる。よって経帙は初唐期、七世紀後半に成立していた葡萄唐草の流れをくむものといえるだろう。

法隆寺献納宝物 (N 31) 赤地葡萄唐草文綾幡足 (挿図 17)

大きな掌状葉と二種類の葡萄の果房からなる。茎の連結部には柘榴形の托葉がつく。果房は萼形のつかない自然に近いものと、マツの球果のように直立した形のものの二種類がある。

球果状の果房の表現は唐・垂拱二年(六八六)の粟善徳造石仏の仏龕にもあり、括りの柘榴形は前掲の六三〇年の函州昭仁寺碑につながるものである。また写実的な掌状葉の表現は六四八年の窈誕墓誌の文様に近い。この綾は七世紀後半から八世紀前半とされる法隆寺系の幡足に使用されたものであるが、文様は固く、唐草の中央に置かれる花形も古様で、七世紀半ば頃の唐の様式に基づくものかと思われる。

正倉院中倉一七七—一 緑綾几褥 (挿図 18)

褥の裏には「大仏殿」の墨書があり、八世紀半ば頃の製作と考えられる。唐草の茎は心葉形を連ねるように展開し、その中に葡萄の果房や花形、葉を配置する。葡萄の果房は細長く二股の萼形がつく。葉は切込みのある三葉形で茎の連結部には托葉がつき、幾重にも巻込んだ巻ひげがあらわされる。

二股の萼がついた細長い葡萄の果房は前述の薬師寺台座内出土透彫金具や金細装大刀の文様を思い出させる。また托葉の下部にあらわされた括りの形は緑地狩猟連珠文錦のそれに近い。切込みのある三葉形の葉や心葉形に展開する唐草の例はめずらしいが、同じ文様の裂が葡萄唐草文綾褥(南倉一五〇—二八)や天平年間頃とされる綾平絹袷襷分四坪幡(南倉一八五)の幡身・坪(正倉院系過渡期幡)、八世紀中ごろの葡萄唐草文綾天蓋垂飾(南倉一八〇—二二)(正倉院系幡)、葡萄唐草文綾褥(南倉一五〇—二八)にも使用されており、八世紀前半から中頃にかけて広く行われていた文様であると考えられる。

正倉院南倉一一九 唐古染安君半臂残欠第九号 (挿図 19)

「天平勝宝四年」(七五二)の年紀があり、八世紀半ばの製作と考えられる。葡萄の果房と切込みある葉、ゆるやかに大きく巻いた巻ひげがつく。果房に萼形はつかず、巻ひげは分かれて反対側に伸びるものがある。唐草は茎が交差して連続してゆくもので、一部に小さな括りがみられる。茎は細く、全体に散漫な印象を受ける。

同様の文様の裂が正倉院や法隆寺献納宝物の中に数点あり、法隆寺献納宝物(N 三八)では、その芯裂に「常陸国 信太郡中家郷戸主大伴部羊調壹端 天平寶勝□(六カ)年十月」の墨書がある。当時広く製作されていた錦の一種であったと思われる。

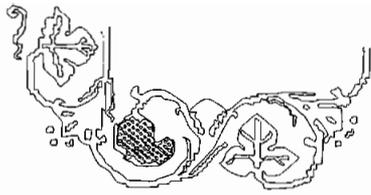
正倉院南倉一五〇—一八・一九 葡萄唐草文綾褥 (挿図 20)

裏裂に「神護景雲二年」(七六八)の年紀があり、称徳天皇行幸の際の献納品と考えられている。葡萄の果房と翻る葉、巻ひげ、写実的な五葉の掌状葉があらわされる。果房に萼形はつかない。分岐部には花弁形があらわされ、茎の連結部には二重の括りがある。茎は太く、巻ひげも固く巻込んでおり、文様全体に密集した感じがある。

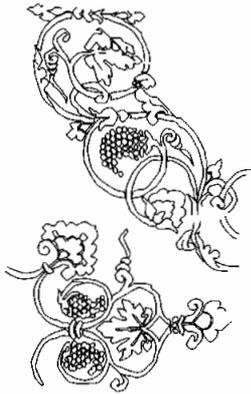
翻る葉や二重の括りの表現は前掲のギメ美術館蔵の唐錦の副文の表現に近く、写実的な五葉の掌状葉も古様である。同種の文様裂は天平年間頃とされる綾単襷分房付四坪幡(南倉一八五)や「天平勝宝四年」の年紀のある駒形帯(南倉一二二—七)をはじめとして数種あり、この文様も当時広く行われていたものと考えられる。

正倉院南倉一四七—一六 赤紫黒紫間縫羅帯 (挿図 21)

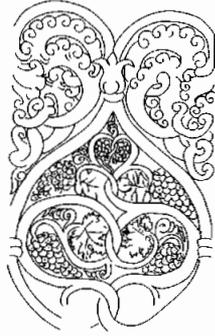
白と黄色の顔料で細長い葡萄の果房と切込みのある三葉形からなる葡萄唐草



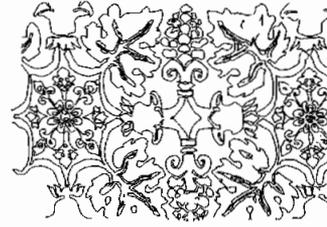
16-1 最勝王経帙 (正倉院)



16-2 唐製錦 (ギメ美術館)



16-3 昭仁寺碑



17-1 法隆寺献納宝物
赤地葡萄唐草文綾幡足



17-2 粟善徳造
石仏仏龕



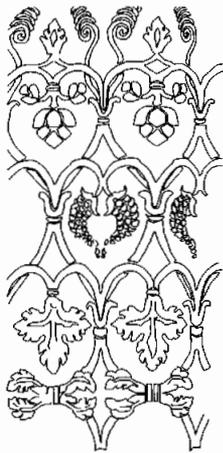
17-3 甕誕墓墓誌

挿図17



16-4 尉遲敬徳墓墓誌

挿図16



挿図18 緑綾几褥 (正倉院)



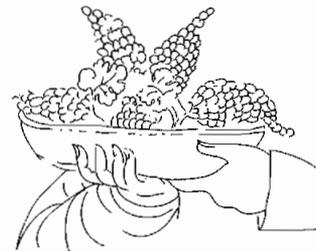
挿図19 法隆寺献納宝物
葡萄唐草文錦褥



挿図20 葡萄唐草文綾褥
(正倉院)



挿図21 赤紫黒紫間縫羅帯
(正倉院)



挿図22 永泰公主墓石槨内壁南面線刻

をあらわす。莖は細くやわらかな曲線を描き、絵画的な雰囲気をもつ。果房には三叉の萼形がつく。切込みのある三葉形は前掲の緑綾几褥や最勝王経帙を思いつき出させる。羅は大仏開眼会や聖武天皇一周忌齋会で使用された幡にみられる素材であるから、本作例もまた八世紀半ば以降に製作されたものと考えられる。

葡萄の果房と掌状葉や巻ひげを主な構成要素とする葡萄唐草の遺例は、器物装飾には少なく、染織品に多い。染織品の作例は早いものには七世紀後半から八世紀初めと考えられるものがあるが、八世紀半ば頃に集中している。唐草は連結式で、葡萄の果房には萼形をつけず、自然の姿に近いものが多くみられる。当時の葡萄唐草をあらわした染織品の作例には、①ゆるやかに巻いた巻ひげと切込みのある葉をもち、中央に花形を置く連結式唐草、②固く巻込んだ巻ひげと掌状葉をもち、中央に花形を置く連結式唐草、③萼形のついた細長い果房と切込みのある三葉形をもち、心葉形を描く連結式唐草の三種類がある。これらは色違い裂など複数の作例が伝存しており、染織品の文様として国内で広く行われていたものと考えられる。

三

以上、日本に伝存する葡萄唐草の例を見てきたが、本稿でとりあげた作例を時間軸に沿ってあらわすと表1のようになる。ここではこの表を参照しながら日本の葡萄唐草の変遷と特徴について明らかにしたことを整理し、まとめたい。

中国で葡萄唐草が流行したのは初唐期、七世紀後半から八世紀初めのことといわれるが、日本の葡萄唐草の遺例は七世紀末から八世紀半ばまでの間に集中

している。器物にあらわされた文様は七世紀末から八世紀初めの頃に多く、染織品の遺例はこれより少し遅れ、八世紀前半から半ば頃に多い。

実在する植物に発想を得た葡萄唐草は、中国化の過程で空想上の植物である花唐草と融合し、果房は花文と合体して合成花が誕生する。この花芯に葡萄の果房をつけた合成花の例は正倉院宝物の文様に多くあり、当時、日本でもたいへん人気であった花文であったことが知られる。染織品を除くと正倉院宝物中に葡萄唐草の例が少ないのは、器物の装飾文様としては合成花の方が好まれたためであり、結果として器物装飾としての葡萄唐草は早くに衰退したものと考えられる。中国ではこの合成花のつく花唐草と並行して葡萄唐草も行われているが、日本では葡萄の果房から合成花への交替があったようである。

日本の作例では半パルメット唐草を主体とするもの、蔓唐草を主体とするものが比較的早く出現し、花唐草と結びついたものや自然の葡萄の掌状葉や巻ひげをもつ写実的な葡萄唐草が主流となるのは、これより少し遅れる。半パルメット唐草を主体とした文様には朝鮮半島の様式の影響が認められるが、以後の作例は初唐様式を反映したと考えられるものが多い。また日本製と考えられる作品の中には、海獣葡萄鏡にみられるような丸みをおびた果房と掌状葉、巻ひげを備えた写実的な葡萄唐草は見当たらず、海獣葡萄鏡の葡萄唐草と日本製の工芸品の葡萄唐草の間には直接的な影響関係は認められない。

変遷をたどると、①蔓唐草から花唐草へと変化する流れ、②写実的な葡萄唐草から花唐草へと変化する流れと、③写実的な表現を保ち続けるという大きな三通りの流れが認められる。①②は器物装飾に、②③は染織品の文様にみることができ、唐草の形状からみると②は波状唐草に、③は連結式の唐草に特徴的といえる。

細部の表現では、葡萄の果房は細長いものと丸みを帯びたもの二種類に大別される。前者は器物の装飾に多く、後者は染織品に多くみられる。また細長い

果房はカエデ形の葉と組み合わせ用いる例があり、これらは比較的早い時期の作例に多い。器物装飾にみられる細長い形の葡萄の果房は、中国の作例では一般的とはいえず、日本の葡萄唐草の特徴の一つに挙げることができる。永泰公主墓の石槨内壁画には細長い葡萄の果房を盛った器を手にした女官の姿を描いたものがあり(挿図22)、あるいはこのような形を祖型とした葡萄文様が八世紀の初めに日本へ伝えられ、以後、国内で継続的に使用されていた可能性も考えられよう。

葡萄文様はディオニソスやアナヒータ女神に対する信仰と結びつき、豊饒を意味する瑞果文として発達した。シルクロードを通じて東漸したこの文様は、中国では西域的な異国情緒あふれる文様として初唐期に流行し、やがて葡萄の果房と花文とが結びついて花心に葡萄の房をつけた合成花が生まれる。日本へは葡萄をモチーフとした装飾文様は、葡萄としての果実の形を保ったまま、あるいは花と融合した形で伝わり、受け入れられていった。日本の葡萄唐草の遺例は七世紀末から八世紀中頃に多く、器物装飾では七世紀末から八世紀初め、染織文様としては八世紀中頃に集中する。葡萄文様の発展形である葡萄状の房をもつ合成花については稿を改めて論じることには、やはり小さな果実の集合体が豊饒、多産、繁栄をイメージさせるものとして、当時の人びとに受け入れられていたということが考えられよう。日本において葡萄文様は、発達のもととなった本来の宗教的意味を失い、その果房を花とも果実ともつかない不可思議な形へと変容させながらも、なお人びとが共通して願う豊饒をイメージさせる瑞果文あるいは瑞花文として機能していたのである。

(注)

- (1) 林良一「葡萄唐草文新考―イーライン系瑞果文の東漸―」『美術史』三三三
- (2) 齋東方氏によれば葡萄唐草を初唐の高宗から則天武后期にかけて流行した文様であるという。(齋東方「唐代金銀器研究」中国社会科学出版社 一九九〇)
- (3) 林良一「薬師寺本尊臺座の葡萄唐草文」『国華』八一〇、同「法隆寺五重塔塑像金棺の葡萄唐草文」『国華』九一七、同「東洋美術の装飾文様 植物文編」同朋社出版(一九九二)、伊東史朗「葡萄文様の一展開―薬師寺金堂臺座の文様をめぐって―」『学叢』九
- (4) 網干善教・木村芳一「加守庵寺」『当麻町史』当麻町教育委員会(一九七六)
- (5) 水野敬三郎「金堂の天蓋」『奈良六大寺大観第二巻 法隆寺二』岩波書店(一九七九)
- (6) 敦煌莫高窟第三一四窟では藻井縁飾の内側に半バルメット唐草があらわされている。
- (7) 林良一氏は半バルメット葉に沿った平行曲線を玉虫厨子の彩画の唐草に行われていた彫文系要素につながるものとしている。(林良一「東洋美術の装飾文様 植物文編」二四八頁)
- (8) 東野治之氏は「橘夫人と橘三千代の浄土信仰」(MUSEUM)五六五)の中で、厨子の墨書からその製作年代をほぼ大宝から和銅頃のものとしている。
- (9) 安藤佳香氏は莖についた輪郭が二重になった半截の葉形を初唐期の敦煌莫高窟の壁画にみられる「開ききつていない若葉形を側面からみた場合の輪郭線の重なりを二重線として表わしたものが一段と形式したものである」。(安藤佳香「佛教荘嚴の研究 グプタ式唐草の東伝」中央公論美術出版(二〇〇三)二二五頁)
- (10) 久保智康「作品解説」23金銅山形飾金具「特別展覧会 金色のかざり―金属工芸にみる日本美―」京都国立博物館(二〇〇三)
- (11) 林良一氏は「法隆寺五重塔塑像金棺の葡萄唐草文」(『国華』九一七)の中で金棺の葡萄唐草を五重塔心礎の舍利容器よりはやや遅れ、三月堂緒尊の唐草文や東大寺の染草の葡萄唐草文よりは先行するもので、このような文様は七〇〇年前後から三十年間くらの期間には裝飾意匠に出現してもよいとし、塑像金棺は和銅四年(七一二)の製作としている。
- (12) 「薬師寺発掘調査報告」奈良国立文化財研究所(一九八七)
- (13) 新潟県教育委員会・甘肅省博物館編「天馬かけるシルクロードの秘宝 中国甘肅省文

(西暦)

650



泉男生墓墓誌 (679)



法隆寺五重塔
舍利容器



法隆寺金堂天蓋

700



薬師寺台座内発見
魚子地花唐草文銅板



法隆寺五重塔塔本塑像 金棺



伝橘夫人念持仏厨子



薬師寺金堂基壇出土
透彫金具



薬師寺金堂木尊薬師如来坐像台座



銀壺 (正倉院)



東大寺金堂鎮壇具 金細装大刀

750



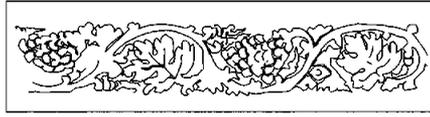
沈香木画箱 (正倉院)



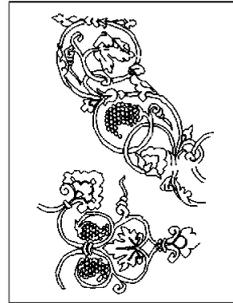
円鏡十二支八卦背第13号 (正倉院)

* □内は中国の作例

表1 日本の葡萄唐草文の流れ



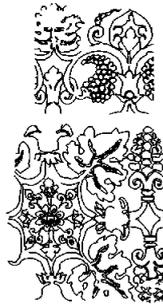
羅基基誌 (648)



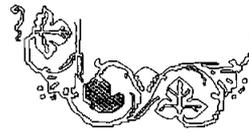
唐製錦 (ギメ美術館)



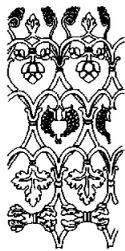
阿弥陀三尊及び二比丘厨子
(法隆寺)



法隆寺献納宝物
赤地葡萄唐草文綾幅足



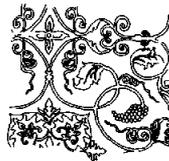
最勝王経帙 (正倉院) (748)



緑綾几褥 (正倉院)



葡萄唐草文綾褥
(正倉院)



法隆寺献納宝物
葡萄唐草文錦褥



紫地鳳形錦御帑 (正倉院)



緑地狩獵連珠文錦 (正倉院)



赤紫黒紫同縫羅帯
(正倉院)



赤地鳳凰唐草丸文縷織絨 (正倉院)



法隆寺献納宝物 狩獵文錦褥

- 物展」新潟県・中華人民共和国甘肅省（一九九〇）、甘肅省文物工作隊「甘肅省涇川出土の唐代舍利石函」『文物』一九九六一三
- (14) 齋東方「唐代金銀器研究」中国社会科学出版社（一九九九）、中国社会科学院考古研究所河南第二工作队「河南省偃師市杏園村的六座紀年唐墓」『考古』一九八六一五
- (15) 町田甲一「薬師三尊像」『奈良六大寺大観第六卷 薬師寺全』岩波書店（一九八〇）、林良一「薬師三尊像（金堂）の裝飾文様」（同書）
- (16) 倪潤安「40 葡萄龍鳳紋銀碗」『花舞大唐春 何家村遺宝精粹』文物出版社（二〇〇三）
- (17) 水本咲子氏は「初唐の植物文様について」（『美術史』一一八）の中で高宗後期の墓誌文様として咸亨元年（六七〇）の李勣墓、上元二年（六七五）の阿史那忠墓、調露元年（六七九）の泉男生墓を挙げ、この時期を初唐様式完成期としている。
- (18) 林良一「薬師寺本尊墓座の葡萄唐草文」『国華』八一〇
- (19) 伊東史郎「葡萄文様の一展開—薬師寺金堂台座の文様をめぐって—」『学叢』九
- (20) 潘亮文「解説」二四 敦煌莫高窟第三二二窟 十一面観音像」『世界美術大全集 東洋編 第4巻 隋・唐』小学館（一九九七）
- (21) 「解説」30 円鏡 十二支八卦背 第一三号 一面」『正倉院の金工』日本経済新聞社（一九七七）。また蔵内数太氏によって卦文の置き方にも誤りがあることが指摘されている（蔵内数太「正倉院八卦背鏡私考—特に金銀山水八卦背八角鏡について—」『正倉院年報』第二号）。
- (22) 「図版解説」94—98 沈香木書水精荘箱 裝飾畫」『正倉院の絵画』日本経済新聞社（一九六八）
- (23) 齋東方「唐代金銀器研究」（注2）
- (24) 「御紙」一枚 一枚紫地鳳形錦 一枚長班錦」とあるうちの「紫地鳳形錦」とされる。
- (25) 松本包夫「図版解説」28 紫地鳳唐草円文錦」『正倉院裂と飛鳥天平の染織』紫紅社（一九八四）
- (26) 澤田むつ代「上代裂集成—古墳出土の織維製品から法隆寺・正倉院まで」中央公論美術出版（二〇〇一）
- (27) 松本氏は八世紀後半（松本包夫「正倉院裂と飛鳥天平の染織」紫紅社 一九八四）、
- (28) 澤田氏は奈良時代後期としている（注26前掲書）。
- (28) 井上正「阿弥陀三尊及び二比丘像厨子」『奈良六大寺大観第五卷 法隆寺五』岩波書店（一九七〇）
- (29) 注26前掲書
- (30) 注26前掲書
- (31) 注26前掲書